

京田辺市主催の「一休さんウォーク」における社会環境的調査 —年代別にみた 2014 年度と 2019 年度の実態比較—

○ 田中春菜、三島一樹、柳田昌彦（同志社大学スポーツ健康科学部）

キーワード：一休さんウォーク、社会環境的調査、年代別

1. 緒言

京田辺市が主催した 2019 年度の「第 22 回一休さんウォーク」に参加したウォーカーを年代別に比較し、特徴や課題を明らかにすることを目的とした。また、2014 年度に行われた同様のアンケート調査結果と比較し、5 年間で参加者像の変化も明らかにすることで、今後の「一休さんウォーク」の活性化に向けた方策について検討した。

2. 研究方法

2019 年 11 月 9 日に京田辺市が開催した「第 22 回一休さんウォーク」の参加者は、907 名であった。このウォーキングイベントでは、毎年 6・11・17km の 3 コースが設定されている。

対象者には、集合調査法を用いて無記名による自記式質問紙をゴール後に配布し、記入後に回収した。幼児、児童などの子供を除く 675 名からの回答をもとに、20 歳以上の 611 名を本研究対象として解析を行った。

質問項目は、参加者の基本情報として、「年齢」、「居住地」、「参加回数」、「参加コース」、「運動習慣」などを質問した。イベントに対する評価や満足度として、「情報源」、「同伴者」、「誰かを勧誘したか」、「参加目的」、「来年の参加希望」などを質問した。

まず初めに、各質問項目における単純集計を行った。次に、対象者を年代別に 20 歳代を「青年期」、30～50 歳代を「壮年期」、60 歳以上を「老年期」の 3 つに区分し、各質問項目とのクロス集計を行った。各項目の尺度レベルに合わせて、Spearman の順位相関係数、Kruskal-Wallis 検定を用いて解析した。なお、各検定における有意水準は 5%未満とし、統計ソフトとして SPSS Statistics version25 を用いた。

3. 結果及び考察

2019 年度「一休さんウォーク」参加者は、青年期が 10.2%、壮年期が 23.2%、老年期が 66.6%であった。

年代における特徴を 2014 年度と比較すると、5・60

歳代が減少した分、7・80 歳代が増加し、日本の高齢化の影響が参加者像にも反映されているものと思われる。

クロス集計の結果、年代と基本情報との間に有意な関連が認められたのは、「居住地」、「参加回数」、「参加コース」、「運動習慣」、「痛み」の 5 項目であり、イベントに対する評価や満足度との間に関連が認められたのは、質問項目のうち 12 項目であった。

市内から参加の青年期は、壮年期や老年期と比較すると運動習慣のない者が多かった。「交流の場」の満足度が最も高く、歩く目的よりも同伴者である家族とのふれあいが中心であることが推測された。壮年期は市内からの参加者が多く、初参加に比べてリピーターが多かった。また、参加目的に「家族や友人との交流」を挙げる者が最も多いことから、今後は友人や家族での交流をより楽しめるようなイベントの新規提供が求められる。老年期は市外からの参加者が多く、「体力向上」、「健康増進」といった身体的な健康を目的とする傾向が見られた。また、他の年代に比べてリピーターが最も多く、長距離コースの参加者も多かった。一方で、普段の生活から痛みを感じている者や参加後に痛みを覚えた者が多かったことから、老年期のコース選択に際しては、より細心の医学的配慮が必要である。

以上のように、参加者像は年代ごとに異なり、2014 年度の調査時から年齢構成や参加目的などにも変化が生じていたことから、今後のイベントの活性化においては、社会的背景の変化や年代ごとの特徴をさらに考慮したイベントづくりを行うことが求められる。

4. 結論

「一休さんウォーク」の参加者は、年代別に見ると 60 歳以上の老年期が 66.6%と最も多く、年代によって、参加目的、参加コース、参加回数などに違いが見られ、今後のイベントの活性化においては、社会的背景の変化や各世代の特徴を十分に考慮したサービスの提供が重要である。

